
王たちの宴 T h i r d 北の王編

スギ花粉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王たちの宴 Third 北の王編

【Nコード】

N6933J

【作者名】

スギ花粉

【あらすじ】

これは・・・一人の青年と一人の武人の物語。彼らは出会い・・・そしてどのような決断を下していくのか？
これは「王たちの宴」をある程度読んでもらわないと分からないと思います。補足みたいなもんです

プロローグ（前書き）

え〜北の王編です。本編を読まないと・・分らないかもしれ
ません。まあ、読んでくださってる人は、分かりますが・・ど
うぞ〜。

プロローグ

「ま、待ってください」

ハア・・・ハア・・・と息を切らせながら坂を登っていく

「
はるか先から叱咤をつける

「仕方ないじゃないですか・・・こんな坂・・・疲れないほうがおかしいですよ」

「
「分かってますよ・・・そのおかげでこの景色が見られるのですからね・・・感謝してますよ」

目の前には、壮大な大自然が広がっている。

この森の先にそびえる山こそ・・・ドルーン山脈だ

もうすぐ、あの山から太陽が顔を出すだろう

「
「・・・精霊たちを感じるようです・・・見ていますね」

「
「

「そうですね・・・アトス神は唯一神らしいですけどね・・・」

「

と何やら怒ったような声色だった

「はあ〜・・・また・・・そんな無茶をいう・・・」

「

「自分にできる事なんて、限られてますからね・・・その中で
どれだけのうまく立ち回れるかが重要だと思います」

「

相手から不機嫌な気配が漂ってくる、それを敏感に感じ取る

「・・・何か間違っているでしょうか？自分はそのように生きる
のが一番効率的だと思いますよ」

「

「え？」

「

何故だか分からない・・・自分の言ってる事は論理的なはずだ・・・
それに比べてなんと感情的な事か・・・でも・・・自分が間違っ
ているように感じてしまうのだ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・分かりましたよ

・・・・・・・・・・・・・・・・見せてやるつもりじゃないですか!!

「になれ!!」

その時・・・・・・・・山の頂上から太陽が見え始め・・・・・・・・まわりを光に包んだ

プロローグ（後書き）

まあ・・・次からが本編みたいなもんです

湖（前書き）

え〜〜こんにちは。スギ花粉です。この人・・・誰だか分かるでしょうか？分からない人すいません。まあ・・・本編の補足みたいなものですので。ではどござ〜〜

湖

ジヨルンは思う

(何ということだ……………)

国王は結局、理由をつけられ……軍の統率権を法王からもぎ取れなかった

神王の軍との戦いはまったく無駄だったといえる。

魔法が効かないという神王との闘い……………法王の命令といえど、他の将軍たちは恐れをなした

そこで国王が自ら名乗りを上げたのだ……地位向上の機会とみたのだろう

そして……………国王派の私が指揮することとなった

だが、それでも大將は別の将軍……クレア・オークハートという小娘がとることになった

ギリッと歯を噛みしめる

今でも、自分が鍛えた兵たちの叫び声が聞こえる

(……………まったくもって暗愚だ)

今や魔国との戦いが本格化している。

そんな中・・・法王の怒りの矛先は北だ。

北部総督のソロス・スタットックが理由をあげ、兵を出さないのだ

これは反乱だと息巻いているものもいる

もともと北はアーツス神の信者が少ない、昔からの精霊信仰が盛んなのだ

それに僅か100年・・・北部の人々はなお独立意識が強い。

反発するのも仕方ないだろう

「ハア・・・」

（自分も・・・もう歳だ・・・後何度・・・本格的に戦えるのか・・・）

闘ってこそ・・・武人だ

自分の人生は戦がすべてだったのだ

幼き頃から軍学を学び、若くして將軍となった

・・・実力でのし上がったという自負もある

事実・・・ドラグーン王国との戦では数々の戦功をあげた

味方からは名将と頼りにされ・・・敵からは軍神と恐れられた・・・

それが今や帝都で新兵の訓練などをやらされている

・・・

だから、魔国戦には参加させてくれと申し出た

だが・・・断られた。

老骨扱いだ・・・

その時・・・廊下の先からとある人物が歩いてくるのが見えた

「これは光の勇者様」

とジョルンは挨拶をする、その白い髪の女性は礼儀正しく挨拶を返してくれる

「おはようございます・・・ジョルン將軍」

「この度の魔王討伐の件・・・おめでとうございます。見事・・・役目を果たされましたな。後は、我ら軍人にお任せください」

という勇者は少し顔を曇らせる

「・・・はい、ありがとうございます」

「??.??.?」

ジヨルンは少し違和感を感じたが、今度は勇者の方から質問がきた

「ジヨルン將軍は・・・魔国戦には参加されないのですか？」

「・・・・・・・・・・私はもう歳です。後は才能ある若者に任せても良いと思います」

「そんな・・・・・・・・模擬戦の時の動きは勉強になりました。素晴らしい動きでしたのに」

「いえいえ、勇者様の指揮ぶりもなかなかのものでしたよ」

実際、この勇者の指揮は素晴らしいものがあつた。

(・・・・・・・・他の將軍にも見習ってほしいくらいだ)

これで武術まで極めているのだから、恐れ入る。

「・・・・・・・・私など・・・まだまだです」

やはり・・・・・・・・少し様子がおかしい

ジヨルンは勇者に会ってから感じている事を言ってみることにした。

「勇者様・・・・・・・・何やら悩んでおられますね？」

「・・・・・・・・分かりますか？」

「はい・・・・・・・・年の功とでも申しましょるか・・・・・・・・迷いは武人にとつて一番の敵ですよ・・・・・・・・その悩みが何かは私には分かりません。で

すが・・・後悔しない決断をなさませ」

「はい・・・ありがとうございます。少し・・・励まされました・・・
では」

と去っていく勇者

その後ろ姿を見ながら思う

(・・・迷い・・・か)

と苦笑しながら自分の部屋へと戻った

すると・・・扉の下に何かが挟まっている

それを手に取って見る、ジョルン

それは1通の差出人も書いていない手紙であった

この手紙がジョルンの運命を大きく変えることとなる

|||||

ギーコ・・・ギーコ・・・

船を漕いで、帝都近くの名もない湖の中央へ行く。

すると・・・そこには一隻の小船があり、一人の男がいた

であったはず……」

「……軍令は絶対です……指揮官に従わなくては軍として成り立ちません」

「悲しいな……無能な上司を持つと苦労するのは下の者ですね……
將軍の場合……あの時ばかりではないはず」

「……どういう意味でしょうか？」

ふ……と皮肉そうに笑う

「国王は無能な男といたのですよ」

「……それは……不敬罪にあたりますよ」

「はん！！あんな無能に何ができますか……女狐に利用されるだけの駒にすぎない」

そういうと、ソロス・スタットックは遠くを見つめる

そして、いきなり宣言した

「我ら北は帝国より独立します」

その言葉を理解するのに幾許かの時を要した

「それは……反乱ですか？」

「反乱？馬鹿なことを言わないでもらいたいですね．．．北部の人間はアトス神なんぞに屈したりしません。100年間も虎視眈々と狙っていたのですよ．．．飛躍の時をね」

スタットック家を継いだのは、男であった。

若くに両親をなくし．．．．．そしてこの男が北部総督となった。

その後の剛腕ぶりは中央にまで噂が聞こえてきた．．．

だが．．．黒い噂も絶えない．．．

あの一件もある．．．

油断はできない

「．．．．．」

ジヨルンは黙った。

これから重大な決断をすることになるかもしれないから．．．

だが、総督も何も言わずにその場を沈黙が支配する

堪らなくなり．．．ジヨルンから話しかけた

「．．．．．なぜ、私にそのような話を？このまま法王様へと報告するやもしれませんよ」

「ハハハハハ・・・真に忠義なら報告すべきですね・・・だが・・・そうしないはず。もともと・・・あなたは国王派。これは賭けでした・・・自分は賭けや勝負事が好きでしてね・・・しかし・・・勝算の低い勝負はしないのですよ」

そしてさらに言葉を紡ぐ

「あなたは法王に不満をもっている・・・実力もある・・・だが運がない」

「運・・・」

「そう・・・運です・・・あんな無能を主に仰いでしまったこと。上にたつものが無能であること・・・それは罪であるといつてもいい」

「・・・」

「遅くはないですよ・・・自らの上にたつ者は選ぶものです・・・決められるものではない。我らと共に戦ってもらいたい・・・ジヨ
ルン将軍」

その時・・・風が吹き・・・湖に波がたつた・・・

湖（後書き）

感想・意見ありましたら。励みになります。

古の掟（前書き）

え〜楽しんでいただけたら、幸いです。ではど〜ぞ〜

古の掟

(自分の領地は神聖帝国の中央よりだ・・・何よりまず法王様に取
り入った。今・・・総督に兵を出させると脅迫を受けている)

冷や汗ものだった

それがやっと総督が北部の領主たちを自分の城に集めてくれた

これで・・・一安心だ

だが・・・自分の娘を連れてこいとは、いったいなぜなのか・・・
？

ハアーーーーとため息を吐く。長く一緒に娘と馬車に乗っているが、
会話はいつさいない。

我が娘ながら・・・男勝りに育ったものだ・・・しかも・・・精霊信
仰をしている

やめて欲しかったが・・・言えなかった。

そもそも北部では精霊信仰が盛んなのだ・・・アトス神はや
はり無理やり押し付けた感が否めない

ライガーは総督に娘を連れてこいと言われた意味について、考えて
みる事にした

(総督はもしかしたら、自分の娘を気にいったのかもしれない。そ

「……反逆だ……それは神聖帝国に対する反逆ですぞ!!」
だが、年若き北部総督はライガーの方を見向きもしない

「……我らに精霊の加護があらんことを……古より君臨する北の王よ!!今、ここに宣言しよう!!100年前に途絶えた……王の系譜を復活させよう……我こそ第87代……北の王……ソロス・スタットック!!」

「な、何ということをして!!……法王様は決してお許しになりませんぞ!!」

とライガーがそこまで言った時……やっとな周囲の異変に気づくことができた

自分以外がみな……イスに座ったままなのだ

(ま、まさか)

「……北の王を名乗るためには、すべての領主の承認が必要だ……みなに問う……我を北の王として承認するか!!」

「承認します!!」

自分以外の領主たちが答える

(認めん!!私は認めんぞ!!)

「……グラートン家の領主の娘……マーガレットよ……お主

は承認するか？」

「はい・・・我らが北の王よ」

と、答えるマーガレット

(自らの親を売るだ!!!)

バツとその場から逃げ出し、出口へ走る

だが・・・ボタンっ!!と扉が開いたかと思うと大勢の兵士が現れ、ライガーはあっという間に捕まってしまう

そして外に連れ出され・・・自分は地面に押さえつけられる

総督がゆっくりと自分に近づいてくる。

「ライガー・・・北の領主でありながら・・・女狐へと媚を売るその態度・・・許しがたい

古の掟により・・・北の王を認めぬものは・・・王自身の剣で斬る」

ジャリンつと剣が鞘から抜かれた音が聞こえた

「お許しを・・・お許しを・・・」

(嫌だ!!!死にたくない!!!助けてくれ!!!)

「ふん!!!」

と風をきる音が聞こえる

そこでライガーの意識は、途絶えた

古の掟（後書き）

誤字・脱字ありましたら。感想・意見ありましたら。励みになるの
で

忠告（前書き）

え〜〜スギ花粉です。楽しんでいただけたら幸いです。では・・・ど
うぞ〜〜

忠告

今、城壁の上から南の大地を見ている

自分の横にいるのは、ソロス・スタットック・・・北の王だ・・・

「さすが法王・・・すばやい判断だ。すでに魔国に向かっていた軍勢を呼び戻している」

「ですが・・・よろしかったのですか？中央の兵が東へと向かいました、その時に援軍を装い帝都を落とす事もできましたのに・・・」

ソロスのジョルンに対する敬語はなくなっていた。自らの部下に話しているのだから、当然だった。

「そうだ・・・確かに合理的だ。しかし・・・それではダメだのだ。・・・愚かだがな」

と皮肉そうに笑う年若き男

ジョルンはそれを見て、なぜかは分からないが

「それでいいのですよ・・・」といていた

ジョルンは自らの信頼する兵一千と共に北へと下った

自分は北に行くと、信頼する兵たちの前で明かした。すると自分も連れて行ってくれと頼み込む者が大勢いた。

意外だった……だが、嬉しくもあった。

その気持ちはありがたいと思ったが、家族がいる者が大半だった。だから、他の者に迷惑がかからないような者たちを選別した。

「……しかし、良いのですか？いきなり私を総大将などにして」

「構わない……実力があれば登用する、当たり前のことだ。北の兵は情弱な地方軍とは違うぞ」

「はい……全身全霊をかけて勝って見せます」

「……もうすぐ冬が来る。地利・天候・すべてが我らの味方だ

ここである程度……時間を稼いでもらうぞ」

「かしこまりました。1年でも2年でも持ちこたえて見せます」

ジヨルンは感激していた……無駄なしがらみが何もない

北の兵たちは初めは怪訝そうに自分を見ていたが……模擬戦をしてからは自分を認め始めていた

いい兵士だ……鍛え抜かれている

この者たちと、全力をもって戦いの事だけを考えられる。

……軍人はそれでいいのだ

(もしかしたら……叶うかもしれない)

「今・・・準備をできてな・・・その成功いかんで楽をさせられるかもしれない」

「準備？・・・ですか」

「ああ・・・だが成功する可能性は高い」

自分は知らなくてもいい・・・自分の戦場はここなのだ

ジョルンは未だ来ぬ軍を・・・

北の大地をいつまでも見つめている・・・

「気をつけるよ・・・レイスが狙っておるやもしれんぞ」

とソロス・スタットックが可笑しそうに忠告した

忠告（後書き）

誤字・脱字ありましたら。感想・意見ありましたら

將軍（前書き）

え〜楽しんでいただけてるでしょうか？スギ花粉です。ではどうぞ〜

將軍

北が神聖帝国から独立してからすでに3週間がたっている

そして遂に……敵も動き出した

「ジヨルン將軍……中央の精銳がこちらに向かっています」

「やはり、籠城はさけたか」

神聖帝国の帝都は、アーツス神の総本山でもある。

あそこを戦場にする事は神官の猛反発があると見ていたが……やはり出てきた

軍人からしてみると愚かという他ない……

この極寒の大地への進軍か……

今……この最前線の城には、北の領主たちの軍勢はいない。

彼らは北部の首都・トーラン……に集結しつつある。

だから、数少ない兵での守備だ……

「それと……本隊から少し先行する2万の部隊がいます」

「何だと？」

「・・・おそろくですが・・・この城を落とすつもりかではないかと」
「・・・」

（確かにこの守備隊の数と城の大きさなら、そこまでの大軍でなくとも落とせる可能性はある・・・だが・・・2万では全滅もありえるぞ）

「・・・旗は見たか？」

「は！赤い薔薇に剣・・・オークハート家の家紋です」

「・・・八八八八八」

「ジヨ、ジヨルン將軍？」

いきなり笑いだした將軍に怪訝そうにする兵士

「いや、すまん。アートス神よ・・・あなたのお導きに感謝いたします」

「は？」

「「こちらの話だ・・・それでどれほどで、ここに着く？」」

「おそろく2日後には」

ふむと何やら考える素振りを見せるジヨルン

「そうか・・・分かった。下がって良いぞ」

静かな野営地を見る

ジヨルンはしばらく様子を窺っていたが・・・すっと手を上げ、振り下ろす

900の部隊が突っ込んでいく

敵はあっという間に大混乱に陥った

僅か900人だ・・・敵にも犠牲はほとんど出ていないだろう
だが・・・もはや烏合の衆だ・・・2万人の混乱などすぐにおさまる訳がない

ジヨルンは1000の兵と共にじつと敵陣営を見つめる

すると敵兵の中から離脱する集団があった

それを見て1000の兵とともにその集団を追う

横から突っ込み、その集団を真っ二つに割る

自ら剣を振り、敵を切りつけ・・・戸惑っておろおろしている將軍を馬からたたき落とす

すでに敵はばらばらに逃げている。おそらく本隊と合流するのだろう

900には可能な限り追撃するように命じている・・・数が少ないにこしたことはない

ジヨルンは馬上から、地面に尻もちをついている者に話しかける

「・・・お久しぶりですね・・・クレア將軍」

「く、ジヨルン！！この裏切り者！！」

と地面から馬に乗る自分をキツと睨みつけてくる

「・・・・・・・・・・」

それを黙ったまま見つめる

「殺ばいいでしょう！！」

「・・・・・・・・殺してやろうか？」

ジヨルンは自分でも驚くような底冷えのする声で喋っていた

「え？」

その顔が呆気にとられる

「軍学校で習うのだろう？貴族は捕虜となったら・・・多額の身代金を支払えば解放される・・・と」

ぐいっと顔を近づける

「だが・・・貴様には！！私の精鋭を殺された恨みがある・・・戦死したと伝えてもいいんだぞ？」

「・・・」

ガタガタと震えている

・・・たったこれっぽっちの殺気にも耐えられないのに將軍とは
呆れてものもいえない

こんな者の血で自らの剣を汚したくない・・・

「・・・分かったら黙っている・・・帰還する!!」

ジヨルンとその集団は意気揚揚と帰還した

將軍（後書き）

誤字・脱字ありましたら。感想・意見お願いします

興味（前書き）

え〜〜〜スギ花粉です。纏める話なんですけど・・・このまま行く
うかと考えています。色々アンケートに答えていただきありがとうございます
〜〜〜

興味

「ジヨルン将軍がオークハート家のクレア将軍を捕虜にしたそうです」

今、ソロスは文官の報告を聞いている

「なるほど……さすがは名将といわれるだけの事はある。彼のよ
うな人材を逃すようでは神聖帝国の底が知れるというものだ。で・
・北部の領主の軍勢はどれだけ集まった？」

「はい……今の所6割という所です。首都近くの領主はすべて揃
いましたが・・やはり田舎の領主の軍勢は集まるのに時間がかかり
ます」

「そうか……できるだけ急がせる・・ジヨルンもあの城ではいつ
までも持たない。いつ捨ててもいいとは言っているが……あの
誇り高い男が逃げるかどうか……」

そして、机の上両手を組む。

「神王の宗教反乱……そして初めての魔国軍の進撃・・西部・
東部の地方軍はほぼ使えない。何より……中央軍も無傷とはいえな
い……そして我が北部は最高の状態だ……この機会を逃すわけに
はいかない」

文官は……全員に護衛がついている。

北部は決して忘れない。

100年前の事件を……あの事件がなければ、北の王国が大陸を統一していたかもしれないに……

自分には武芸の才能がまったくない。

だから、強がることなどしない。

いつも城の中でさえ出かける時は、10人ほどの護衛に囲まれている。

忌々しき……レイス……北部100年の恨みの根源……

神聖帝国を滅ぼしたら一人残らず……殺してくれる!!!

「それで例の件は……どうだ……首尾の方は？」

「はい……ドラグーン王国は今継承権の争いが勃発しています……ですので不可能かと」

「まあ……仕方ない。神聖帝国に長年攻められている国だしな。そう簡単に協力が取り付けられるとも思っていない……肝心なのはもう一つの方だ」

「はい……そちらは何とかかなりそうです」

「そうか……会談の場所は……ドルーン山脈の近くのサイロ村で良いかな……」

「陛下……ですが……よろしいのですか？元勇者とはいえ……
相手はあの魔族の……王なのですよ」

と文官が心配そうにいう

「構わない」

「ですが……会談の時は森で二人きりとなりますのでしょう？……
・どんな輩かも知れませんが」

「大丈夫だ……大丈夫なのだ……なぜなら
らな」

最後の方は小さくて聞こえなかった

「いいか……これが実現できるかどうかで勝利の可能性が大きく
変わる。軍人は戦場で命を懸けて戦っている……貴様ら文官
も全力を尽くせ!!」

「は!!」

文官はバタバタと忙しなく部屋から出て行った

机の上で手を組んだまま、じつと扉を見つめている北の王

(異世界から召喚されたといわれる勇者……そして指名手配犯と
なり……魔国の將軍になり……そしてついに魔王にまで上り詰めた
……どのような人物なのか……興味が尽きませんね……)

興味（後書き）

誤字・脱字ありましたら。意見・感想ぜひぜひ下さい

悪影響（前書き）

え〜〜スギ花粉です。楽しんでいただけたら幸いです

悪影響

「き、北の王!!」

と兵士が凄まじい勢いで報告に来た

「何事だ……騒々しい」

「ま、魔王が現れました!!」

その発せられた言葉をじつくりと吟味するソロス……コツコツとテーブルを人差し指で叩く

「……当たり前だ……会談は今日なのだから。むしろ来ない方がおかしい」

「そ、それが軍勢を率いています!!」

コツコツコツ……と先ほどよりも強く叩く

「……こちらも5千の軍で来ているだろうが!! いったい何だというのだ!!」

ソロスは要領を得ない報告にイライラしていた。

「そ……それが……ま、魔獣を従えております!!」

それを聞き、ガタッと椅子から立ち上がる

「……………馬鹿な」

「いえ…事実です！！ドルーン山脈近くの森から突然大量のベアウルフが現れ、それを従えています！！」

「……………」

ボスンつと椅子に座り直し、両手を組むソロス

（そんな馬鹿な…魔獣は誰にも懐かないはず…………）

…………魔族が…魔獣を従える技術を見つけ出した？…………ですが、魔国侵攻の時に魔獣を使役していたという話は聞いていませんし…………切り札だった？

それとも…………異世界の力でしょうか…………だとしたら、光の勇者も同じ事ができる可能性がありますね…………ジョルンの話では勇者は参戦しないだろうという事でしたが…………確証はないですし…………

いや…闇の勇者個人の能力である可能性も否定できない…………

どちらにしる…………現魔王が魔獣を使役できるとすると…………将来の私の野望に…………悪影響を及ぼしますね）

……………

……………

ソロスは報告で聞いていたとはいえ、目の前の光景が信じられなかった

ドルーン山脈近くの森に、数十匹のベアウルフが見える

……森の中にはさらに多くのベアウルフがいるのかもしれない

そして、一際大きなベアウルフに跨っている……黒髪の男がいる

その隣には銀髪の魔族の女性が控えている

(……あれが魔王……さて……どのような人物なのでしょうね……)

ソロスと10人の騎士たちが魔王の目の前で止まる

グルルつと周りのベアウルフが唸り声を上げている……少し落ち着かない

すると、魔王の方から挨拶をしてきた

「初めまして……魔国第2代魔王……カイ・リョウザンです」

「北の王……ソロス・スタットクです。これらの者たちは私の護衛です。レイスが狙っている可能性がある……魔王は……素晴らしい護衛を引き連れていきますね」

「ありがとうございます」

と、にこにこ笑う魔王。それをじっと・・・見つめる

「・・・・・・・・・・さて・・・早速ですが始めてもよろしいですか？今も我ら北部は神聖帝国と闘っておりますので、時間を無駄にしたくはありません」

「もちろんです」

「会談は森の中で・・・私と魔王・・・二人きりで行いたいと思います
が・・・いかがですか？」

「いいでしょう・・・護衛はジェミン・・・頼めるかい？」

カイは跨っているジェミンに話しかけると、

「ご安心ください・・・周りは我が一族が死守いたします」

グルルッと唸る

（・・・・・・・・・・操られているようには見えない。どついう事なので
しょうね・・・・・・・・・・まったく・・・これほど近くでベアウルフを見る
事になるとは予想していませんでした）

「北の王・・・それでいいでしょうか？信じてもらおうしかないんだが」
「」

「・・・・・・・・信じましょう・・・・・・・・あなたが闇討ちをするような人物だ

とは思っていませんから。では、参りましょうか」

というと、ソロスは魔王と共に森の中へ入って行った

悪影響（後書き）

誤字・脱字ありましたら。感想・ご意見待ってます

心配（前書き）

え〜楽しんでいただけてるでしょうか？これは本編とほぼ同じ内容になっています。まあ・読んでくれる人は分かっていると
思います

心配

現在……森の中で自分は魔王と相対して話し合いを行っている。精霊たちはしつかりと見ていてくれるだろう

「同盟という事でしたが……それは共に神聖帝国と戦うという事ですか？」

「はい……その通りです」

「しかし、帝都には多くのアーツ神の信者がいるのではないですか？……信仰心とはそう簡単に変えられるものではないはずです」

「ご安心下さい……それはこちらである準備をしてあります。アーツ神を敵にまわさない準備を。別に私はアーツ神の信仰自体を否定する気はありません。ですが……宗教が権力と結びつく事を私は許しません。信仰とはその者の心の中にあるだけで良いのです。魔族の王であるあなたにとっては、アーツ神の教えは否定したいかもしれませんが……」

「……いえ……アーツ神や神聖帝国については少し……詳しく調べましたから……それが魔族の害悪にならないのなら、それは人それぞれの考え方の問題です。押し付ける事はできませんしょう」

「なるほど」

「……魔国は、先代の魔王陛下の侵攻の傷もいえていません。ですから、そこまでの兵力は出す事はできません」

「分かっています。神聖帝国を滅ぼすのはあくまで、我ら北です。魔国には精鋭の一部を引き受けていただければよいのです。それだけで、可能性はかなり上がります」

「……………そうですね」

と少し考え込む

「そして……神聖帝国を滅ぼしたあかつきには、現在の神聖帝国の東部を魔国領として治めていただこうと思います。もともと東は魔族たちが多く暮らしていた地域でもあります」

「……………」

沈黙する魔王……………ソロスはそれを不服があるというように判断した

「確かに平等な条件ではないかもしれませんが……ですが……あくまで神聖帝国を滅ぼすのは我々です。西部・中央・南部は治めさせていただきます」

「……………条件があります」

「はい……可能な限り叶えたいと思います……どのような条件でしょうか？」

（ただで同盟が成り立つなどとは私も考えていませんよ……さて……こちらの領土での最大の譲歩は人口の少ない南部の一部までですね。それをどれだけ抑えられるか……）

そして魔王は話しかけてくる

「現在の東部には、多くの人間族が暮らしています。その人間たちの中には、魔族に恐怖を抱いている者も多くいます。どうしても魔国の支配を受け入れられない人は、北で受け入れて欲しいのです」

(……………)

「……………それが条件」

「はい……これだけは絶対に譲れません。それさえ受け入れてくれるなら、魔国として軍を出しましょう」

自分はじつと魔王を見つめた……この元勇者は……いったい何を目指しているのだろうか……

「……………あなたは……不思議な方だ……」

「そうですね？」

「はい……なるほど……何となく分かったような気がします」

(気をつけなければ……私も魅入られてしまつかもしれませんね)

「?????」

とそれを聞いた魔王が不思議そうな顔をする

コツコツコツつと膝を人差し指で叩く・・・これは自分の癖なのだ。それがばれた所で問題はない

「その条件を呑みましよう。同盟のためらな安いものです。・・・
・・・・ところで・・・あなたは本当に異世界から召喚された勇者なので
すか？」

「はい・・・」

「信じられない・・・そんな世界があるなんて・・・アトス神の
信者の戯言だと思っていました。帰りたいとは思わないのですか？」

「そうですね・・・この世界に召喚された時に、戻る術はないという
事は言われました」

「・・・この世界に住む者として、謝りましよう。無理やり我ら
の問題に巻き込んでしまった。神聖帝国を滅ぼした場合、戻するため
に最善を尽くします事もできますが・・・どうですか？」

（正直な話・・・強大な力を持つという異世界人の方は危険な存在
だ。極端な話・・・たった一人のために国が滅びる事もあるかもしれ
ない・・・）

「いえ・・・カエデ・・・つまり光の勇者ですが・・・はどう考
えてるのか分かりません。ですが自分は帰る訳には参りません。自
分にはこの魔国を導く責任があるので」

「・・・そうですか・・・分かりました。では・・・同盟の方は

成立という事で

「はい・・・よろしく願います」

自分と魔王はぎゅっと手を取り合った

「さて・・・これで同盟の話は終わりましたが。もし・・・よろしければ・・・異世界の話を聞かせてはもらえませんか・・・非常に興味があるのです」

「いいですよ・・・まあ・・・自分の答えられる範囲でなら」

「では・・・まず文化や政治制度について・・・略・・・」

|||||

「いや〜大変興味深い・・・特に自らの王を投票で選ぶという制度は素晴らしいものだと思います。上に立つものは、常に監視されている状態になる訳ですから。ただ・・・民衆とは時に愚かなものです。本質を見ようとしない・・・それで最善の選択がなされない事もあると思いますが」

（そして何より・・・魔獣を使役する事ができる訳ではないという事を聞いたのは幸いでした。これで不安要素が一つ減りましたね）

・・・二人は雑談をしながら、元来た道に戻っていく・・・

その時、ソロスは聞かねばならないことが一つ残っている事を思い出した

「あ~~~~~・・・そういえば・・・魔王は・・・傭兵の赤き狼と親しいと聞いたのですが・・・」

「・・・赤き狼ですか？・・・はい・・・よき友であると思っていますよ」

魔王は意外そうな表情をしている。それはそうだろう。一介の傭兵の名が、突然出てきたのだから。

「・・・赤き狼には、自分が異世界に来てから色々世話になりました。命の恩人といってもいいと思います。大変感謝してますよ・・・恐らくですが・・・今もアゴラスにいると思います」

（・・・そうですか・・・まったく・・・便りの一つも寄こさないで・・・どれだけ心配しているか分かってもらえないようですね。魔王にも、できるだけ危険な事に巻き込まないようにしてもらわなければ）
だから・・・一応知っておいてもらおうと思っていた。どうせ、内緒にしてるだろうから。

「そうですね・・・お元気なですね・・・」

・・・

・・・姉上

は

心配（後書き）

誤字・脱字ありましたら。感想・ご意見待ってます。励みになるので。

襲撃（前書き）

え〜楽しんでいただけてるでしょうか？スギ花粉です。ではどうぞ〜

襲撃

「必要ない」

今、ソロスは北の首都トーランの城の中庭を歩いている。その横を一人ローブを着ている者がいっしょに歩いている

「ですが・・・今やあなたは神聖帝国から狙われる身です。レイスが暗殺にくるかもしれませんが」

「ふん！！そんな事は言われるまでもない・・・北は絶対に忘れない・・・あの悲劇を」

ソロスは話しかけてくる男を少しうっとおしく感じ始めていた

「我ら北は魔国などよりも、しっかりとレイスの脅威を理解しているのだよ・・・」

「・・・北の王は・・・レイスの本当の恐ろしさを理解しておられません」

「理解しているとも・・・恐ろしき暗殺集団だ。だからこうして、城の中でさえ10名の護衛をいつも従えている」

その言葉通り、自分とコーリンと名乗った魔王からの使節団の代表の周りは騎士10人がしっかりと固めていた

彼らは武芸大会などで優秀な成績をおさめたものばかりだ・・・
一人一人が相当の腕なのだ

しかもここは北部の首都・・・トーラン・・・今や地方領主の兵たちも続々と集結しつつある

絶対に安全だ・・・むしろここより安全な所などないともいえる

「だから、闇の軍・・・といったか？そんな者たちの助けなどいらない。魔国で魔王の護衛をしていた方がいいぞ」

（まったく・・・魔族の王とは思えないですね・・・心配性すぎますよ）

「・・・そうですか」

とコーリンと名乗る男は、黙ってしまふ

やっと諦めてくれたか・・・と安堵のため息を吐く

ドサドサ・・・

その時・・・後方から、不可思議な音がした

ソロスは不審に思い振り返る

そこには・・・自分の後方を護衛していたはずの3人の騎士が倒れていた

その先には、ローブを着ている二人の者が立っている

・・・ソロスは何が起こったのか理解できなかつ

た……

その二人はゆっくりとこちらに近づいてくる……

周りの騎士はその異変に気付いたのか、一人がすぐさま抜剣して斬りかかった

ギン！！……だがそれを一人が剣で受け止め、その隙にもう一人が騎士を斬る

ドサッと倒れてしまう

そして…周りで一斉に影が動いた

中庭のどこに隠れていたというのか……すでに残りの6人の騎士の周りは15人程が囲んでしまっている

ソロスはそれを見て、やっと理解することができた。自分は…襲われているのだ

この北部の首都…トーランで…しかも城の中の中庭で…自分は殺されかけている

あっという間に4人も護衛がやられてしまっている

二人はどんどん近付いてくる…

……声が出ない……だが…今大声を出した所で間に合うとも思えない

「……トン……と、何か木の棒のようなものが自分の首を叩いた」

そのまま、膝から中庭に崩れ落ちる

「……ハア……ハア……」

何度も……何度も……自らの首をさする

(……ある……自分は……生きている……なぜ……)

「……無礼をお許してください……北の王……ですがこうでもしない限り理解して下さるまいと思いましたが。ご安心ください皆気絶しているだけです」

その時……コーリンがゆっくりと近づいてくるのが分かった

「彼女たち二人は、闇の軍の隊長を務めているものです。相当の腕がたちます……ですが1対1ではレイスに勝てないかもしれない……それほどの敵なのです」

「……彼らが……役立たずといたいのか？」

「いいえ……北の王を護衛していた騎士たちはみな……腕がたちます。ですが……それは正々堂々の立会いや戦場での事。我らの闘いは、そのようなものではありません。闇から闇へ……音もなく……その敵から命を守るには特殊な訓練が必要なのです……特に今は地方の軍勢が集まり、知らない者の出入りが多くなっており……一刻の猶予もありません。どうか……ご理解の程を……」

その言葉をじつくりと吟味するソロス。カタカタと手が震えている

「……分かった……護衛を頼もう。そうだ!! ジョルンも守る必要がある!!。神聖帝国との戦には絶対に必要な人材なのだ!!」

「ご安心下さい……こちらに来る前に寄らせていただきましたが……さりげなく100名が守っております。ジョルン將軍を殺す事は……不可能に近いかと思われます」

自分がジョルンに言った言葉を思い出していた……

「気をつけるよ……レイスが狙ってるやもしれんぞ……」

(……甘かったのは私の方という訳ですか)

「……だが……いいのか？それだけ魔王の周りの警護が疎かになるのではないか？」

それを聞き、コーリンは可笑しそうにこう言った

「ご安心ください。陛下は……我らが束になるよりも強いですから」

襲撃（後書き）

誤字・脱字ありましたら。ご意見・感想待ってます。励みになるの
で

出撃（前書き）

え〜〜楽しんでいただけてるでしょうか？スギ花粉です・ではど
うぞ〜

出撃

今、北部の首都トーランの城壁に二人の人物がいる。北の王・ソロス・スタットツクと将軍・ジヨルン・ツインズである。

「よく時間を稼いでくれたな・・・ジヨルン」

「ありがとうございます。ですが、城を落とされてしまいました」

「構わない。あんなちっぽけな城、これから我らが奪つものに比べようもない。くれてやれ」

ジヨルンは城壁の外に整列している軍勢を見る

「・・・圧巻ですね」

「ああ・・・若くして北部総督になった時から、ずっとこの時を待っていた。取り戻す時をな・・・」

「神聖帝国の精鋭との闘いは、厳しいものとなるでしょう」

「だが・・・やるしかないぞ」

「はい。期待には応えてみせます。魔国を動かされた陛下のなされたこと、決して無駄にはいたしません」

「ああ」

そしてゆっくりと城壁の端へと歩いていくソロス。そして宣言する。

国とは意外と脆いものだ・一人の英傑によって強く結び付いた国ほど、その支柱を失うとあっという間に壊れてしまう。

だが・魔国はすでに新しい魔王の元でまとまり始めているという。その者も英傑であるのだろう

「く・・・敵にまわすと、これほどまでに厄介だとは!」

数の上では北部の軍勢が優っている。だが、さすがは神聖帝国の精鋭達だ。あの動きはさすがだ。少しずつ圧されてきている

ジヨルンはどうすればいいか、ずっと考え続けていた。

(どうする...このままでは後退せざるを得なくなるやもしれん。だが...この状況を打破する策など)

その時...脳裏にある言葉がよみがえってきた

☆...ジヨルンは頭で戦を考え過ぎる.....荒ぶる魂でよ!」

「.....八八八八」

(何と懐かしい・・・今この時になって思いだすとは。答えを出そうか...ミリア)

「皆のもの!! 騎乗しろ!!...私の剣を持って!!」

ジヨルンが言うと、従者が長剣を差し出し出してくる。それを受け取り

ジヨルンは自分の愛馬に跨る

長剣を横に構え、ジヨルンは進み始めた

神聖帝国の頃から自分を支えてくれた兵士1千と、北部軍勢から選
び抜いた者たち1千が一つの獣のように動き始める

戦だぞ・・・ジヨルンは愛馬の腹を挟んだ脚でそう伝えた。愛馬は
荒い息を吐いている。

敵陣営がこちらを見つめていた。

愛馬がいくらか脚を速めた・・・・・・2千の騎馬隊が後方に続い
てくる。

何度か突っ込む様を見せていた。だが、今までは敵の槍部隊の前で
引き返してばかりを繰り返していた。

稚拙だったかもしれない。だが、すでに動き出している。決断した
ら迷わない事だ。

神聖帝国の左右の陣は、やや突出している。もし突っ込めばその左
右は囲んでくるだろう。

つまり、巨大な袋の中に自分たちは突っ込んでいく格好となる

神聖帝国の将軍はこちらの事を笑っているかもしれない。自ら包囲
される。そうとしか見えないはずだ。包囲の輪を縮めれば、自滅す
るしかないのだから。

ギン!!とジヨルンの剣と敵の兵士の剣がぶつかる。ぐいぐいと押ししてくる。若い兵士だ・・・力では勝てないだろう・・・だが

「ぐ~~~~は!!」

ジヨルンはそれを押し切ると、低くしゃがみ込み足払いをかける。

「わ!!」

とその兵士は意表をつかれ、バランスを崩す。その一瞬を見逃さず、首筋を一線する。

プシュ　!!真つ赤な血が噴き出し、その兵士は倒れる

その血がジヨルンの上から降り注ぐ

「はぁ・・・はぁ・・・」

(情けない!!・・・たかだかこれっぽっち動いただけで、もう息が切れるなんて)

だが、自分は確実に高揚し始めている・・・血に・・・酔ったのだ。

「はぁ・・・私は!!ジヨルン・ツインズ!!神聖帝国の精鋭よ!!こんな老人一人殺す勇気もないのか!!」

その大声に何人がが気付き、雄たけびを上げて突っ込んでくる

ギン!!それを華麗に受け流し、剣を持っていない方の手で殴りつける。そしてよろけた所で、鎧の関節部分に剣を突き刺す

「ぐわー!!」と倒れる兵士

いくら固い鎧を身に纏おうとも、薄く作らざるをえない所は存在する。

「はあ・・・はあ・・・はあ」

ジヨルンは少し弾んだ息を整えようとした。だが・・・

「せい!!」

と槍を持った兵士がジヨルンを突いてくる

「が!!」

ジヨルンの右肩に敵の槍が突き刺さる・・・だが・・・そのまま敵を睨みつけるとグイッと自分の肩にその槍を押しこむ。

「ぐ~~~~~!!は!!」

そのまま槍を握り続けている敵を一刀両断する。

「・・・はあ・・・見たか!!」

ジヨルンはゆっくりとその槍を引き抜く

そこにまた二人の新手が現れる。

だが先ほどの攻撃で.....腕が持ち上がらない

「討て!!!一人でも多く討て!!!この原野を赤く染めろ!!!」

ソロスが檄を飛ばしている

ジョルンが敵陣営に突っ込んだ時は驚いた・・すぐに離脱すると思
ったのだ・・だが一向に出てこなかった

果たして・・・ジョルンは生きているだろうか。あれほどの激戦だ。

ソロスは本陣から、快走する中央軍を見つめている。

「騎馬隊を総動員して、追撃させる!!!決して一つに纏まらせるな
!!!本隊はこのまま帝都へと進軍する!!!」

後はゆっくりと進撃することだ・・・もう彼らに逃げ道はないの
だから

出撃（後書き）

誤字・脱字ありましたら。感想・意見待ってます。励みになるので

最後（前書き）

え〜〜スギ花粉です。ではどうぞ〜

最後

今・・・帝都は北部の軍勢に囲まれてしまっている

無理に攻めてこようとはしていない・・・ソロス・スタットクは知っているのだろう・・・こちらが兵糧に乏しい事を・・・

神王との戦・・・魔国との戦・・・そして北部の軍勢との戦のために兵糧はすでないも同然だった。

何日か前にも、民衆が「コッパンとよこせ!!」「」と城に集まってきた

私は、ただ追い返せと命じた・・・それなのにあの男は、民衆に向かって矢を放って追い返した

愚かな・・・これ以上民衆感情を逆なでしてどうしようというのだ

「・・・それにしても、まさか神官の買収までやっていたとは」

中央の軍勢が快走したという報告が入ってから、数日がたち・・・何人かの高位の神官が帝都を抜け出していた

そして北の王に忠誠を誓い、法王である私がアトス神の権威を悪用しているなどと声高に叫んでいるらしい・・・

それを真の意味で信じている者などいないだろう。だが、そんな事はどうでもいいのだ。貴族たちには魅力的に映ることだろう・・・神に背かずに助かる道があるのだから・・・

民衆達は総攻撃と同時に内側から門を開ける気だ・・・彼らにとつては信仰心よりもたった一個のパンの方が重要なのだ・・・

愚かな・・・なぜ小麦の値段が跳ね上がっているのか考えようともしない。

ソロス・スタットックが神王との戦の頃から、少しずつ小麦を買い占め始めていたのだ・・・周到な事だ

こちらの被害が小さければ、そのまま何事もなかったかのように高値で売りさばればいいのだ。反乱の証拠になどなるうはずもない・・・

パンの値が急騰し食べられなくなった民衆達は、小麦の値を吊り上げているその張本人に助けを求めようというのだ・・・これが滑稽でなくて何と言おう

法王は玉座をギュツと掴む

ソロス・スタットック・・・やはり殺しておくべきだったのだ

北部総督の任命式の時、初めてソロス・スタットックに会った

まだほんの子供ではないか・・・と一瞬私は油断した

だが・・・あの子供は、私が油断した事に気付いた・・・その目で分かった

その瞬間に認識を改めた・・・この男は子供ではない、私を脅かす

存在だと

だが、その後は比較的従順な態度を見せた。特に反発などせず、協力的だったとさえいえる

そして国王派に近づき、あつという間に重要な地位を得た。私も国王の勧めということもあり、財務相を任せてみる事にした。

だが、あつという間に頭角を現した・・・スタットツク家は何もない所から金貨を生み出せるという噂までだった。

神聖帝国に必要な男だった。だから、殺すのにも躊躇した・・・いや・飼いならせると思ってしまったのだ。

「・・・・・・・・バル」

それに答えるものはいない

バルアミ は魔王の暗殺に失敗していた。しかもドルーン山脈で負傷したらしい・・・レイスにも相当の犠牲が出ている

そしてレイスは神聖帝国を見限り、逃げ出したのだ・・・北部の人間は彼らを決して許さないだろうから

初代国王・・・スタンニス・グランワールと初代レイスの頭・・・ヴァエス。

彼らは何か特別な絆で結ばれていたらしいが・・・長い年月がたち、今やレイスはかなり独立した組織となっている。

彼らなら、どこでも生きていけるだろう。

まったく……自分たちが異世界から呼び寄せた勇者が魔族の王になるとは……どこで選択を誤ったのだろうか

国王はすでに助命を嘆願した。最後の最後まで情けない人だった

この国の風習とはいえ・あんな男と結婚した事が最大の間違いだっただ

……エリシアはどうするだろうか

私はどこかで分かっていたのかも知れない……負ける事を。だから光の勇者と共に帝都から逃がした……

ドラゴン王国に亡命するなど……生き残る道があるかもしれないからと

……

あの娘は……私の子だ

私と同じことをするでしょうね。

フーとワインが注がれたグラスの淵を指でなぞる

「私は法王……決して捕虜になどならない。我らはアーツス神の申し子。」

誇りなさい！！我らは人間族！！我らは進化し続ける種族！！我

「……未来を託された種族なのだから！」

そういつと、法王はぐいっと毒をあおった

最後（後書き）

アトス神については、本編で説明がありますので、明後日には、説明できると思いますので、そちらで読んで下さい。

名もなき戦士たち（前書き）

え〜〜スギ花粉です。今日のは、う〜〜ん、分かりにくいといえ
分かりにくいかもしれません。ではど〜〜ぞ〜〜

名もなき戦士たち

．．．．．変わる．．．．．どんどん．．．風景が変わっていく．．．
．．．．．

周りには机が多く並んでいる…がやがやと喧騒がある中

ある集団…というか二人が白熱した議論をしている

「そんな事は不可能だ．．．」

「いいえ！！可能よ！！」

バンバンっと目の前の女性がテーブルを叩いている。

「ありえない．．．大軍にこんな少数で突っ込んで円陣を組むだと
??本隊がたどり着く前に全滅してしまう」

「あなたは頭で戦を考え過ぎるのよ！！」

「．．．．．頭でなく、どこで考えるというのだ？」

「荒ぶる魂でよ！！」

それを聞いてやれやれと頭をふる

「．．．．．まったく論理的ではないな」

それを隣で聞いていた無精ひげを生やした男が大笑いする。

「ガハハハハハ・相変わらずミリア嬢は勇ましいな」

キンッと剣を抜き、ゴンに剣先を向けるミリア

「ゴン・・・次に私をミリア嬢、なんて呼んだら・・・その舌掻
っ切ってあげる」

「や・・・やめようよ・・・喧嘩はよくないよ」

ピップはオロオロしながら、止めにはいる。

「ガハハハハハ・怖ー怖ー」

すると、バン！！と扉が開き一人の男が入ってくる

「はいはい・・・只今戻りましたよっ」と

「セ、セバス遅いよ・・・もう朝だよ」

だがセバスはそんなピップの注意にもまったく耳をかさない。

「おう・・・ミリアじゃねーか。相変わらずいい女だぜ」

「残念ね・・・あんななんかまったく好みじゃないわ・・・セバス」

二人がいつものやり取りをし始める。

そんな中、ジヨルンはじつと何かを考えている

「ガハハハハ・何考え込んでんだ？ ジョルン」

「いや・・・荒ぶる魂で考えてみているのだが、よく分からないだ」

「「「・・・」」」

それを聞いたセバスがゆつくりと一言・・・こう言った

「俺さ・・・ジョルンって本当は馬鹿なんじゃないかって時々思うんだよな」

・・・・・・変わる・・・また・・・風景が変わっていく・・・

ここは、野営地だ。

「「結婚??」」

「えへへへ・・・うん」

とピップは嬉しそうに報告する。それを聞き、バツとすばやくピップに掴みかかるセバス。

「け、結婚だと!!!まさか・・・お前!!!」

「えへへへ・・・うん・・・ミリアと」

「ば、馬鹿な」

と、セバスはピップから手を離すとそのまま膝から崩れ落ちる。地面に手をつき四つん這いになっている。世界が終わったかのような・・・

「ガハハハハハ・・・こいつはすげーや！！あの女たらしのセバスが口説き落とせなかったミリアを・・・まさか・・・ピップがとは！！」

ゴンはゲラゲラと大笑いしている。そして何かを思い出したかのように言う

「という事は・・・おい！！あの賭け・・・やべーんじゃねーか！？おいおい、みんなセバスに賭けてたから・・・お前の一人勝ちだぜ！！・・・なあ・・・ジョルン！！」

「私は賭けごとなどしていない。賭博は禁止されてるからな。ただ・・・ピップには頑張っただけだ」

「ガハハハハハ・・・真面目なジョルンらしい答えだ！！だが・・・どうするんだ？あの大金は？返すなんて馬鹿な事いうなよ・・・そんな事するくらいなら、みんなでパーっと使っちゃおう！！」

ふむ・・・とジョルンは腕を組んで考えている

「・・・そうだな・・・ピップとミリアの祝儀という形にするのはどうだろうか？」

「ガハハハハ・・・羨ましいぜ！！あんな美人な嫁さんもらってよ！！！」

ゴンはピップに酒を注いでいる。

「式はどこであげるんだ？」

ジヨルンは、セバスを引きずって二人の所へ戻る

「うん・・・小さな教会であげようと思うんだ・・・みんなも絶対来てね！！！」

「ガハハハ！！当然じゃねーか！！！」

「・・・グス・・・グス・・・」

「おい・・・セバス・・・もう泣くな」

「馬鹿野郎！！ジヨルン・・・これはな！！うれし泣きだ・・・馬鹿野郎！！おい・・・ピップ！！絶対ミリアを幸せにしるよな！！！」

「うん・・・ありがとう・・・ゴン、セバス、ジヨルン・・・俺・・・俺・・・」

私たち4人はその夜・・・・・・朝まで飲み明かした

．．．．．変わる．．．景色が．．．においが．．．戦場のものへと．．．変わる

「「「わあああああ！！！！」」」

目の前からドラグーン王国の兵士達が雄たけびをあげながら突っ込んでくる

私の中には、ゴンが大剣を肩に担ぎ押し寄せる敵を見ている

「．．．ゴフ．．．俺の故郷は．．．俺が守る！！かかってきやがれ！！ドラグーン王国の軟弱共が！！ガハハハハ．．．この大剣の錆にしてくるぜ！！」

と叫び、先頭を切って突撃していくゴン。私たちの部隊はその後に続き、大軍へと突っ込んでいった。

まるで鬼神のような闘いぶりだった。一振りで数人をなぎ倒し、鎧ごと敵を一刀両断する。

そして・・・・・・・・・・・・・・・・鬼神はいなくなつた。

(ゴ ン…………お前は守り抜いたよ。…………お前のおかげで本隊が間に合つたのだから)

・・・・・・・・カシャ・・・・・・・・ここで切り替わる・
・・

私は目の端になんとか捉えた・・・・馬に乗り敵陣営に疾駆していく
一人の男を。

敵は槍部隊を前衛に集めている。そのまま突き刺さると私は思った。
だが・・・飛んだ！！私は見た・・・ありえない事だが激突する寸前、
馬上から飛び上がり、敵の槍部隊の頭上を飛び越え、その後ろに控
えている弓兵部隊に斬り込んでいった

私は部隊を率いて急いで突っ込んでいった・・・・無事でいてくれ
と祈りながら

だが、そこにいたのは体中を切り裂かれ倒れる一人の男だつた

私はすぐに駆け寄る。周りには手に弓を持った何人もの敵兵が倒れている

「ハア・ハア・ハア・なあ・ミリアの事は本気だった。本気だったんだ。後悔なんかしてねーよ。あいつら、弓でミリアを狙いやがった。愛する女の事は・命を懸けて守るもんさ」

そして・・・・・・・・・・愛に生きた男はいなくなった

(セバス・・・お前は世界一、かつこいい男だったよ)

・・・・・・・・カシャ・・・・・・・・また変わる・・・・・・・・

私たちは馬に乗り夜道を疾駆している。思いすごしであってくれと心の底から願った。

そして私たちは味方の軍営へとたどり着いた。だがそこは血の海だ

った。

そこかしこに、兵士の死骸が転がっている。

今日は新月だ・・・真つ暗な中、倒れた多くの松明が地面で小さな光を放っている

そんな中・・・私は探していた人物を見つける事ができた

だが、その腹に一本の槍が深く深く刺さっている。

当然駆け寄り、抱き上げる。

「ははは・・・何が神聖帝国の戦乙女かしら、笑ってしまうわね。あんな奇襲にも気付かないなんて私も耄碌したものね。ジョルン...あなたは優秀よ。あなたとの勝負は...私の負けかしらね？」

そして・・・私といつも競い合っていた戦乙女はいなくな
った

(ミリア・・・お前は私が今まで会った女性の中で一番・・・強く気高く美しかった・・・今さらだが気付いてしまったよ・・・私も・・・

私も・・・お前のことが・・・

・・・・・・・・カシャ・・・・・・・・変わる・・・・・・・・

私は横から急に吹っ飛ばされた。そのまま地面へと転がり、すぐに立ち上がる

そして剣を構えて敵に備える。だが・・・そこにはいたのは味方だったのだ

そこには、敵の矢で体をハリネズミのような姿にしたピップがいた

私は叫んだ・・・なぜだ・・・私などのためになぜ自分を犠牲にしたんだ・・・と

「仕方ないだろ・・・体が動いちゃったんだから。そんな事言うなよ・・・ジョルン。せっかく助かったのに。ごめんな・・・ミリアに・・・ごめんって伝えてくれ」

そして・・・・・・・・自分よりも他人を気づかう心やさしい男はいなくなつた

(ピップ・お前には言えなかったけど……ミリアの部隊はもう敵の奇襲を受けて壊滅してたんだ。せめて……せめて死後の世界で幸せになってくれ)

みな……いなくなった。そして……そして……私だけが……

名もなき戦士たち（後書き）

誤字・脱字ありましたら。感想・ご意見待ってます

ジョルン(前書き)

え〜〜こちらをどれだけ読んでくれる人がいるのかわかりませんが、できたら感想とか欲しいですね。ではどうぞ〜〜

ジヨルン

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

まず目に入ってきたのは光だった。初めは眩しすぎて、しっかりと目を開けていられなかった。

だが、だんだん目が慣れていきその光がランタンのものである事が分かった。

「おお・・・気がついたか！！よかった・・・今帰ろうとしていた所だったのだ」

ジヨルンは声のする方へと顔を向ける

そこには・・・・・・・・ソロス・スタットツクがいた

「大事ないか？心配したぞ・・・ずっと眠ったままだったのだからな・
・医者の話では生死の境を彷徨っていたらしい・・・だが峠は越えた
ようだ。安心しろ帝都は落ちた。我らの勝利だ。ジヨルンは運がい
い」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

(・・・・・・・・・・・・・・・・運がいい・・・か)

「……………」

ジヨルンはしばらく黙ってソロスを見つめていた。

そして……………目を瞑る

「?????どうした、ジヨルン」

ソロスは、ジヨルンの様子がどこがおかしい事に気付いた。

しばらく黙っていたが……………ジヨルンはゆっくりと語り始めた

「……………」
ジヨルン
……………」

「私は……………ツインズ家の4番目の子供として生まれました。

姉が2人に、兄が1人です。私にツインズ家の継承権がまわってこない事など、小さい頃から分かっておりました。

こんな地位の低い貴族を婿にもらってくれる女性貴族など、いない事も知っております

だから…私は軍人になった。決してなりたくて軍人になった訳ではない。

しかし・・・私は軍学校で・・・多くの友と出会いました。

共に学び・・・競い・・・そして・・・恥ずかしい夢などを語りあいました。

当然・・・辛いこともあった。だが、それ以上に楽しかった

私の青春時代は・・・間違いなくあの時だった。

そして私たちは、戦場へと出るようになりました。

毎日が闘いの日々でしたよ。雄たけびが響き、そして耳をつんざくような悲鳴が轟く。

そんな中、多くの敵を倒しました。…それと同時に・・・多くの味方を失いました

私の友たちも・・・一人・・・また一人と私の前からいなくなっていきました

国のために・・・愛する者のために・・・自らの名誉のために・・・多くの兵たちが様々な思いを胸に死んでいきました。

戦場は、生と死が混沌とする場所です。どんな鍛え上げた兵士でも、新兵の放った矢で死ぬ事があるのです。

そんな場所に長くいると、必然的に自らの死についても考えるようになっていきます

そんな中……時に、光輝く者たちが現れるのです。敵味方に限らず。

彼らは通常では考えられないような力を発揮し、戦局すら変えてしまう事がある。

儂い光です……ですが……眩しい……命の光。

……

神王との闘いで……一人の少年が戦いを挑んでまいりました。

相手は年端もいかない少年一人……こちらは神聖帝国の精鋭数万……馬鹿げた話です。

ですが……あの少年は臆することもなく……真っすぐに本陣へと向かってまいりました

あの少年が何者なのか……どのような思いを抱いていたのか……それは私には分かりません

ですが……確実に輝いていた。恐怖と同時に……羨ましさも感じていました。

私も輝きたい!!……あの者たちのように!!……立派に死にたい!!!

……

自分などが・・・生き残ってよかったなど軽々しくどうしていえよう・
・・・人生の辛さも知らない・・・こんな若造がだ

自然と・・・敬意を払うってしまう。人生の先輩として・・・自らの
信念を貫き通した男として。

「・・・どれだけ強く、生きたいと願っても、生きられない者が
います。それと同じように死にたいと思っても死ねない者がいるの
でしょう・・・」

「・・・」

ジヨルンは黙ったまま天井を見つめている

「それに・・・ジヨルン將軍は本当に運が悪いですよ」

すると、ジヨルン將軍がゆっくりとソロス・スタットックの方を見る

「私は、国王のような無能ではない。実力のある者を登用しないな
ど・・・決して許しません。あなたの経験と技術のすべてを私の国
のために役立てていただきます・・・死んでる暇などありません
よ・・・ジヨルン將軍」

しばらくじつくりとその意味を確かめ、その言葉の裏に隠されたや
さしさを理解する。

そして乾いた笑い声を上げる

「・・・はははは

「こんな老骨に…生きて働き続けると言われますか。」

「……私は……本当に……運が悪い」

ジョルン(後書き)

誤字・脱字ありましたら。感想・ご意見まっています

エピソード（前書き）

え〜楽しんでいただけてるでしょうか？スギ花粉です。ではどうぞ〜

エピソード

今、ジヨルンは一人の青年が王冠をかぶる所を見ている。一人の神官の前に膝をつき、その時を厳かに舞っている。

そこは謁見の間ではない、トーラン近くの森の中である。

北部の慣習は自分にはよく分からない

ただ分かるのは、この王に仕えてよかったという事実のみだ。

すでに神聖帝国はなくなっている。多くの貴族が北の王に忠誠を誓っている。国王でさえもだ。

ただ……法王と一部の神官、そしてエリシア姫は捕虜になる事を潔しとせずに自害している。国に殉じる……それもまた王族としての務めといえる

北の王は高らかに宣言していた

国教は決めない・自らの好きな信仰を許す・アーツ神でさえもだ。

ただし、それが国に害を及ぼした場合、徹底的に取り締まるというものだ。帝都はアーツ神の総本山だ。一部の狂信者の反発などはあるらしいが、今は沈静化している。

神聖帝国の東部は魔族領になり、魔王が支配することとなった。

どうしても耐えられないものは、北へと逃げてきているらしいが。

恭順する意思を示すものもでてきているらしい

やはり王が元勇者であるという評判や、以前の魔国侵攻の時に食糧を現魔王から直接分けられたという村などは積極的に受け入れているという。

そしてこの前、自分の所にソロスが訪ねてきてこう言った。

「魔王は不思議な魅力のある男だよ……そして強敵になるやもしれん。ジオルン将軍…私はこの国だけで満足する気はない。東部を譲ったのもそこに理由がある。いづれ戻ってくるからだ、はるかなる利息をつけてな。私の目指すものは一国の主ではない。さすがに大陸の王となれば、認めてくれるだろうからな」

ジオルンには最後の意味がよく分からなかった。だが、やはりただ者ではなかった。

存分に働いて見せようではないか……みな、すまない。もう少し……会えるのは遅くなるやもしれん。

私はもう少し見てみたくなった。一人の青年の野望を。それに自分がどれだけ携わっていけるのかを。

王冠をかぶった青年が振り返り、自分を含めた臣下達を見る

「我こそ……北の王だ!!」

控えている者がみな膝をつき頭を下げている

エピソード（後書き）

誤字・脱字ありましたら。感想・意見待ってます。励みになるので

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6933j/>

王たちの宴 Third 北の王編

2010年10月10日21時26分発行